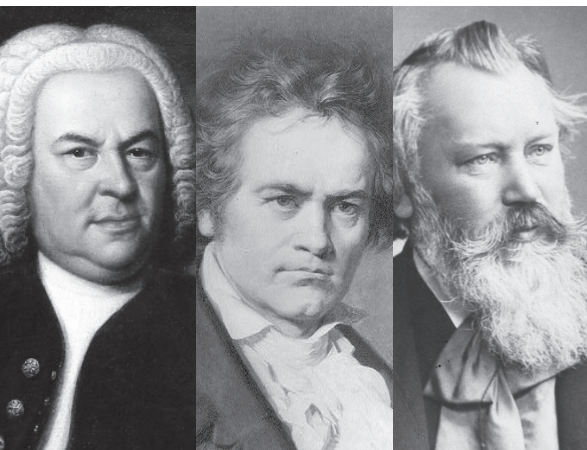




ドイツ三大B
(左：バッハ、中：ベートーヴェン、右：ブラームス)

クラシック界の「三大〇〇」あれこれ

クラシック音楽界には、数多くの「三大〇〇」が存在する。そのひとつである「ドイツ三大B」は、ドイツを代表する大作曲家として、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスの3人の名を並べたものだ。そもそもは、ベルリン・フィルの礎を築いた大指揮者で、大ピアニストでもあったハンス・フォン・ビューローが、



ハンス・フォン・ビューロー
(1830～94)

自分が推していたブラームスを賞揚するために、偉大な2人の作曲家の名を持ち出したと言われている。そう、「ドイツ三大B」なので、ブラームスを、同時代

特集

クラシック界の「三大〇〇」

満津岡信育

に活躍したブルックナー（オーストリア）に入れ替えることは不可なのである。もちろん、ベルリオーズ（フランス）やバルトーク（ハンガリー）もお呼びではありません。

「三大ピアノ協奏曲」という括り方は定着していないが、「三大ヴァイオリン協奏曲」といえば、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの作品で決まりである（「四大」になるとチャイコフスキーが追加される）。

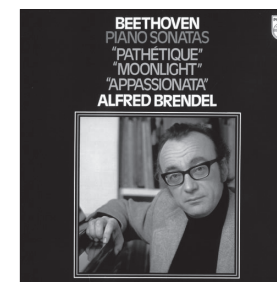
「後期三大交響曲」という括り方が定着している作曲家としては、モーツァルト（39～41番）、チャイコフスキー（4～6番）、ドヴォルザーク（7～9番）の名を挙げることができる。モーツァルトは、38番以前にも人気曲がいくつもあがあるが、チャイコフスキーとドヴォルザークに関しては、「後期三大交響曲」よりも前に書かれた交響曲は、がくんと演奏頻度が落ちてしまうのが実状である。

ハイドンやベートーヴェン、マーラーなどと同様に、シューベルトの場合、「後

期三大交響曲」という書き方はしないが、「三大歌曲集」や「三大ピアノ・ソナタ」（19～21番）という呼び方は存在する。シューベルトによる大きな歌曲集は、没後に編まれた〈白鳥の歌〉を含めて、三つしかないのだから、わざわざ「三大歌曲集」と呼ばなくてもいいような気がするのだが、いずれ劣らぬ名作揃いなので、力こぶを入れて「三大」と最初書いてしまった人の気持ちもわからないではない。チャイコフスキーの「三大バレエ」も同じケースであり、作曲者本人が書き下ろしたバレエ音楽は、〈白鳥の湖〉、〈眠りの森の美女〉、〈くるみ割り人形〉の三つしかないのである。それに対して、ストラヴィンスキーの「三大バレエ」は、彼が初期に書いた〈火の鳥〉、〈ペトルーシュカ〉、〈春の祭典〉を指し、新古典主義に転じて以降のバレエ音楽は、以前に比べれば演奏頻度が増えつつあるとはいえ、野性味たっぷりの「三大バレエ」の人気にはかなわないという現実が横たわっている。

商業的背景もある「三大ピアノ・ソナタ」

「ドイツ三大B」の名付け親であるフォン・ビューローは、ベートーヴェンが残した32曲のピアノ・ソナタを、“ピアノの新約聖書”（旧約聖書はバッハの〈平均律クラヴィーア曲集〉）と位置付けたことでも有名だ。ベートーヴェンの「三大ソナタ」といえば、第8番〈悲愴〉、第14番〈月光〉、第23番〈熱情〉を指すのが一般的であるが、これは、両面合わせ



ベートーヴェンの「三大ソナタ」を収めたLPレコード

て60分以内の収録時間が標準的であったLP時代に、ニックネームが付いた3曲を組み合わせ、1枚のレコードとして売り出したことに由来する。

誰もが納得する「三大〇〇」とは？

モーツァルトの「三大オペラ」といえば、〈フィガロの結婚〉、〈ドン・ジョヴァンニ〉、〈魔笛〉であるが、ワーグナーやヴェルディ、プッチーニは、「三大オペラ」という書き方はしない。大ヒット作が一つだけというビゼーやグノーも「三大オペラ」という言い方は存在しない。そう考えると、「三大テノール」に代表されるように、ぶっちぎりの人気者が3人（あるいは人気作が三つ）存在すれば、「三大」をうたうことは容易であるが、誰もが納得する三つに絞れない場合は、「三大〇〇」と決めつけてしまうのは、異論続出でもつれてしまい、無理が生じてしまうということだろう。例えば、「世界三大指揮者」を決めるとなれば、みんなが納得する3人を選ぶのは、まず無理である、としか書きようがないのである。（まつおか のぶやす／音楽評論家）

渡辺 和彦

(わたなべ かずひこ・音楽評論家)

9月の読響公演は、《定期演奏会》(9日、サントリーホール)、《サントリーホール名曲シリーズ》(16日)、《東京芸術劇場マチネーシリーズ》(20日)、《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》(21日)の計4公演が**下野竜也**指揮、そして《読響メトロポリタン・シリーズ》(3日、東京芸術劇場)は**コルネリウス・マイスター**指揮で行われる。

下野指揮のプログラムは3種あり、《定期》はハイドン作(1762?)とブルックナー作(1891~96、未完)の共に〈第9〉の組み合わせ。ハイドン作品は作曲家本人が当然ながら「第9ジグクス」(手を付けるとそれが最後の交響曲となり、作曲家は死ぬ)に閑知してはいない。しかし彼の〈交響曲第1番〉が番号ゆえに頻繁に演奏されているように、「ハイドンの第9」も有名作になる可能性を秘めている。ブルックナーは近年“完成版”が何かと話題だが、当日は第3楽章で終結する形で演奏される。

下野指揮のプロ二つめは《サントリーホール名曲シリーズ》で、抵抗を表現した〈プラハ1968年のための音楽〉で有名なカレル・フサ(1921年生まれ、チェコ~アメリカ)のもうひとつの代表作(1970)の管弦楽版日本初演。この曲をメインに、松村禎三、モーツァルト、バッハ/ストコフスキー作品の意味深い音楽が披露される。三つめは東京芸術劇場と横浜みなとみらいホールのオルガンをフル活用するプロ(20、21日)。プーランクの深刻な内容を伴う大傑作〈オルガン、弦楽とティンパニのための協奏曲〉(1938、第2次世界大戦直前に創作)と、サン＝サーンスの人気作、交響曲第3番(1886)他が同日に演奏されるのは稀だ。

《読響メトロポリタン・シリーズ》を指揮する**マイスター**(1980年生まれ、ドイツ)は2010年からウィーン放送交響楽団(旧オーストリア放送交響楽団)の首席指揮者の地位にある。2012年の3月に同放送響と来日公演を行い、その6年前には新国立劇場公演〈フィデリオ〉も指揮。今回は、ベートーヴェンのピアノ協奏曲と、今年「生誕150年」を祝っているR. シュトラウスというドイツ音楽“ど真ん中”プロ。日本人とドイツ人の両親をもち、評価と人気を確実に上げているオットのピアノにも期待。